

つくろう

音楽をつくる、つまり「作曲」するアプローチにはさまざまな方法がある。即興的に楽器を演奏したり、パソコンを使って音源をつくったりする方法がある。一方、楽譜に音楽を書き記す作曲法の場合は、その楽譜をもとに多くの人たちに演奏してもらうことができる。

ここではまず、楽譜に書き表して作曲する方法を取り上げるが、その際の作曲順として思い浮かぶのは、まず「メロディー」を書くことだろう。歌の作曲の場合はそのような方法もあるだろうが、実際にはメロディーには必ず和声（あるいはコード進行）がついている。和声の発想なくしてメロディーはつくれない。作曲家たちがメロディーを発想する際に、和声、伴奏の形（リズムなども含む）、その作品の色彩感なども同時に思い描く。ただしそれには作曲のための多くのスキルを身に付けている必要がある。

そこで、この創作のページでは、メロディー、コード進行、リズムなどさまざまな要素に分け、さまざまな角度からのアプローチを行う。その過程を通して、各自、作曲しやすい方法や順序を見つけることを目的とする。

また、本稿では、生徒たちの意欲が高まった際の次へのステップを考慮し、教科書掲載の事柄よりさらに発展的な内容も若干述べておく。

コード進行からメロディーをつくろう

(p.148)

ギターでいくつかのコード進行をつま弾きつつ、即興的に歌詞やメロディーを歌う。昭和の時代の「フォークソング」はそうように生まれたとも言える。《翼をください》(教科書p.8)などはそうした例だろう。そこでまず、さまざまなコード進行を

調べてみる。p.148掲載の楽曲のうち、冒頭の三例のコード進行は大変に似通っている。特に《手紙～拝啓 十五の君へ～》(教科書p.12)、《Let It Be》(教科書p.88)のコード進行は全く同じであることに気づく。そういったことを手掛かりにさらに他の楽曲を調べさせるとよいだろう。そして、好きなコード進行を書き出しておく。こうしてコード進行への興味をもたせる。

そして同じようなコード進行でも、メロディーにどのような特徴があるだろうか。旋律線の動き、リズムの特徴や、メロディーの音の高低の動きなどを調べる。

次に実際に演奏する。ギターを用いてもよいだろう。教科書掲載の譜例は、ピアノでの弾きやすさを考慮し、すべて3和音の基本形で書いてあるが、場合によっては、次のような和音の滑らかな進行にも興味をもたせる。和音の転回形を用いた和声の美しさである。

譜例1 《翼をください》
左手のピアノの動きを変更した例

譜例2 《カノン》のコード進行に基づいたメロディー
左手のピアノの動きを変更した例

譜例1, 2とも、「☆」のような和音の転回形を用いることで、和音の流れが滑らかになる。

譜例1を変ロ長調に移調すると、教科書p.9のピアノ伴奏の和音の流れと類似する。

譜例2のパッヘルベルの原曲では、和音の基本形を用いているが、このようにしてピアノでの演奏を容易にさせるとともに、和音の転回形の響きを味わう。

さらに譜例1, 2は類似しており、このコード進行が広く好まれていると言えよう。

●コードからメロディーをつくるためのヒント

メロディーを自然に思いつけるのが望ましいが、場合によっては、さまざまに工夫を凝らしてメロディーをつくり上げることも必要だろう。そのため指針をここで示した。

その際、非和声音の使用も考えられる。教科書本文では触れていないが、非和声音の名称を知らせるのも良いだろう。

譜例3-① 隣の音に行って戻る際に生まれる「刺繍音」

譜例3-② 2つの和音の間の順次進行(滑らかな動き)によって生まれる「経過音」

譜例3-③ 強拍あるいは和音が変わった際に、まず非和声音から入り、それが和声音へと解決する「倚音」(「アッポジジャトゥーラ」とも呼ばれる)

こうした非和声音は、和音に対して緊張感や色彩を感じさせる。効果的に用いたい。

●好きなコード進行を選んで、メロディーをつくろう

これまでの譜例にあげた楽曲のほか、《少年時代》(教科書p.16)、《A Whole New World》(教科書p.44)、《夢やぶれて》(教科書p.46/これは、これまでにあげたパッヘルベルの《カノン》などのコード進行と類似する)、《民衆の歌》(教科書p.48)、《おお シャンゼリゼ》(教科書p.53)といった楽曲を例としてあげると扱いやすいだろう。

つくったメロディーの演奏に際しては、ピア

ノなどでの和音演奏、メロディーの楽器での演奏、あるいは歌唱と分担すると演奏が容易になる。なお、歌唱を前提として指導する場合は、あらかじめ、歌いやすい音域を確認の上で実施させるとよい。

音階からメロディーをつくろう

(p.150)

コード進行に基づいてメロディーをつくらせると、概ね長調か短調になるだろう。ここではさらに広げて、各種の音階や旋法をもとに、イメージを膨らませる。楽典(教科書p.157)内の「音階」の項目で、さまざまな音階を知り、それに基づいたメロディーをつくらせる。

なお、五音音階を用いた例として、教科書所収の楽曲としては次のものがある。

《小さな空》(教科書p.18)

※ただし、2回だけ現れるE音は例外

《この道》(教科書p.22)

※前半部が五音音階

《里の秋》(教科書p.26)

《茉莉花》(教科書p.58)

《アリラン》(教科書p.59)

《Amazing Grace》(教科書p.96)

《カントリー・ロード》(教科書p.98)

沖縄の音階を用いた例として《谷茶前》(教科書p.64)と並行して学ばせよう。《安里屋ユンタ》(教科書p.103)は沖縄の音楽ではあるが、沖縄の音階は用いられておらず、いわゆる五音音階できている(すべて半音上げると黒鍵のみで演奏でき、「五音音階の例」[教科書p.150の最上段の譜例]ともつながる)。一方で、譜例4に示したような音階に興味をもつのもよいだろう。

譜例4-① ハンガリーの音階(ジプシーの音階)

譜例4-② 全音音階